ルソーの歴史認識における「起源」概念について
―コンディヤックとビュフォンを通じて―

淵田　仁

１．問題の所在

本稿は、ルソーの歴史哲学を再構築するための一つの準備作業である。そこでまずは、彼の「起源 origine」概念を検討する。

スタロバンスキーは以下のようにルソーを解釈している。「彼［ルソー］は最初の項からはじまる、厳密に関係づけられた原因と結果の連鎖を展開する系譜的説明［explication généalogique］をすべて求めている。このような点において、彼はみずからの世紀の精神と一致している」(1)。しかし、本稿ではこのスタロバンスキーの解釈と反対のことを提示する。すなわち、ルソーの「起源論」という論述形式、より明確に言えば彼の「起源 origine」概念は、同時代人のそれとは一線を画している。ルソーの起源論は、スタロバンスキーが指摘するような「原因と結果の連鎖を展開する系譜的説明」ではない。もっと言えば、原因と結果の連鎖ではなく、原因と結果の間にルソーは断絶を置く。

『人間不平等起源論』（以下『不平等論』）のなかでルソーは様々な事象の起源について語っていないということは多くの研究者に指摘されてきた(2)。「自然の叫び声」から「分節音」への移行の起源、所有の起源について、すなわち、自然状態から社会状態への移行の起源についてルソーは明確な回答を与えず、「暴力的な――破局的な――中断」(3)が自然状態と社会状態の間には存在している。この自然状態から社会状態を描くことができないルソーの起源論は、ルソー研究の中で低く評価されてきた。例えば、ドラテは、「自然状態から文明状態へ、あるいは、もしその表現を欲するなら、純粋に本能的な生活から合理的な生活への移行は、ルソーの体系中もっとも弱い部分である」と評している(4)。また、エゲルディンガーは、ルソーが「神の摂理」を持ち出すことによって、自らの理論の論理的不備を解消している、と判断している(5)。

しかしながら、移行の起源を語れない起源論は、ルソーのロジックにとって必然的である。なぜなら、ルソーは自然状態を静的な閉じたシステムとして構築し、論理的移行を記述することは最初から破綻しているからである(6)。この点に関してバチコは、「一見したところ、『不平等論』の著者は自然状態から社会状態への移行の問題が問われることから逃れるように自然状態という観念を構築したように見える。自然状態が出口のないような閉じた円環であるように見える限り、自然と文化の対立は激しさを増す」と述べた(7)。つまり、古茂田が指摘したように、ルソーにとって移行の記述の欠落は「両者［自然状態と社会状態］の本質的差異性を強調するために不可欠の論理」(8)であり、自然と人為を徹底的に対立させ、人為の不自然さを強調しようとすることがルソーの『不平等論』における意図なのである。このような解釈には我々も同意する。

だが、本稿では別なる角度からルソーを読む。つまり、ルソーの「起源論」という形式、あるいは「起源」概念、または歴史叙述の方法に目を向けてこそルソーの『不平等論』の独創性を見

いだすことができるのではないか。なぜなら、ルソーの「起源論」は同時代人の他の「起源論」とは明らかに異なり、不平等の「起源」、言語の「起源」を指し示すことをルソーは避けているからである。つまり、ルソーの「起源論」は起源論の体裁を取っていない。では一体、ルソーはどのような起源論を記述しようとしたのか。それは、ビュフォンの自然学、より限定して言えばビュフォン地質学の方法論と一致する起源論である。以上のことを明らかにするために、まずコンディヤックを参照点としながら、「起源」概念について考察する。そして、ビュフォンの地質学の議論とルソーの歴史叙述がどこまで一致するか検討したい。

2.「起源」概念：コンディヤックとの比較[9]

『不平等論』および『言語起源論』のなかで、「起源」をルソーは定義しない。それゆえまず、当時の「起源 origine」の定義に注目しよう。例えば、『百科全書』のディドロ執筆と思われる「起源 origine」の項目では、「あるものの始まり［commencement］、誕生［naissance］、萌芽［germe］、原理［principe］」[10]との説明がなされている。次に同時代のイエズス会によって編纂された『トレヴー事典』（1752）を見てみよう。ディドロの定義と同様に「起源」は「あるものの始まり［commencement］、誕生［naissance］、原理［principe］、源泉［source］」と定義される。また以下のようにも説明されている。「起源という言葉は、ある結果の原因［cause］あるいは原理［principe］の類義語としてしばしば用いられる」と記されている[11]。このディドロの定義と『トレヴー事典』の定義を見る限り、18世紀において「起源」は原因、誕生、原理を意味する非常に曖昧な語であり、上記の資料にはこれ以上の定義はなされない。

では、コンディヤックの定義を見てみよう。彼は自身の『類義語辞典』のなかで「起源」を定義している。彼の「起源 origine」の項目を見ると、「原理 principe」と「始まり commencement」を参照するよう指示される[12]。先に、「原理」から検討しよう。

> 原理、原因、起源は、一つの結果に関係する。原因とは、生み出された一つの結果、あるいはその契機［occasion］であるものだけを指し示す。原理とは、一つの結果を一つの原因そのものから引き出すところの一つの原因である。起源とは、遠くにある原因［遠因］である。したがって起源と結果の間には複数の中間的諸原因［plusieurs causes intermédiaires］が存在する。[13]

まず、「原因とは、生み出された一つの結果、あるいはその契機であるものだけを指し示す」というコンディヤックの定義の意味するところは、一つの原因は一つの結果と関係し、つねに結果には原因が存在するということである[14]。例を使って考えよう。床の上でリンゴが潰れていたら、それはリンゴが落下したためである。つまり、「つぶれたリンゴ」という結果は、「リンゴの落下」という原因による。次に、この因果関係を引き起こす原因、つまり、より上位の原因がコンディヤックの定義する「原理」である。先ほどの例を使って表現すれば、「リンゴが落下して、潰れる」という因果を引き起こす原因は、重力すなわち万有引力ということができる。つまり、重力がここでは「原理」となる。

しかし、コンディヤックにおける「原理」概念は単純なものではない。科学者としてのコンディ

ヤック像を浮かび上がらせた山口の研究[15]は、コンディヤックの「原理」概念のブレについて言及している。

『体系論 *Traité des systèmes*』（1749）の中で、コンディヤックは天文学者の「諸天体のそれぞれの運動を測定する」という作業を「こうした探究は成功が期待できる」として評価している[16]。しかし、自然学者が「宇宙がいかなる手段によって形成され、維持されているのか、事物の第一原理［les premiers principes des choses］は何であるかを発見しようと企てる。これは失敗するほかない無駄な好奇心である」[17]とコンディヤックは述べる。そして、コンディヤックのニュートン評価はこの見方に関係する。「ニュートンは、自然の第一原理を見抜こうとか想像しようなどということに取り組んだのではない」[18]。ところが、コンディヤックは同じ『体系論』のなかで「原理」について以下のようにも述べている。

> 機械学［mecanique］[19]は、我々が物体において観察した力を利用することを教えてくれる。機械学は運動の法則に基づいており、自然を模倣することで、自然と同じように諸現象を生み出すのである。
>
> それゆえ、機械学における体系は物理学における規則と同じ規則に従う。例えば複雑な機械や時計の中には原因と結果の進行が存在し、そうした進行はその原理を最初の原因［une première cause］の内に有している。あるいは最初のもの［un premier］によって説明される諸現象の進行が［機械や時計の中に］存在する。したがって、宇宙も巨大な機械でしかないのである。[20]

ここで一つ矛盾が生じる。すなわち、このコンディヤックの一文は先ほどニュートンを評価した理由に矛盾するのではないか。その矛盾について山口は以下のように指摘している。

> コンディヤックは、［……］「原因と結果の進行」の「原理」とは「最初の原因」であると述べていたのであった。つまり、ここではコンディヤックは原理を、一連の現象を開始させる最初の原因となる現象だと考えているようである。時計など実際の機械について言えば、一連の歯車を回転させる最初のバネ仕掛けの運動が「原理」だということになる。そして、原理についてのこうした見方を太陽系に当てはめるなら、最初に惑星を運動させた力が原理だということになるであろう。しかしそれでは原理は万有引力であるどころか、彼が批判するところの「自然の第一原因」［第一原理 premiers principes de la nature］だということになってしまう。[21]

この山口の指摘したコンディヤックの自己矛盾について改めて考えよう。まず、コンディヤックがその探求を批判した「第一原理 premiers principles」とは何か。それは「神」のことを指すのではないだろうか。

世界の中には、万有引力や慣性の法則といった様々な「原理」が存在する。ニュートンは宇宙がどのように生成したかについては問わず、万有引力のような「原理」を問うことを求めた。後のカントも宇宙の生成の問いをアンチノミーとして人間の理性の領域から排除した。コンディヤックがニュートンを評価した理由は、ニュートンが神の領域と人間の領域を区別し、宇宙の生

成という神の領域の問い、すなわち第一原理を不可知なものだとしたことに由来するのではないだろうか。このように考えると、コンディヤックにおける「第一原理 premiers principes de la nature」とは神のことであり、最初から彼はこの神の領域の問いを退けていたのである。

しかしながら、機械学についてコンディヤックが述べた箇所では、「第一原理」ではなく「最初の原因 une première cause」、「最初のもの un premier」と記されている。この二者は時計といった一つの機械内部にある歯車の連動（「原因と結果の進行」）を駆動させる最初の一突きである。そして、宇宙自体をも「機械」とコンディヤックはみなしている。この点を鑑みれば、宇宙を作った最初のもの、すなわち「神」を明らかにすることが機械の内部構造を知ることによって可能であるとコンディヤックは考えていたかのように思われる。

だが、宇宙という機械がどのように形成されたのかという問いを自らに課すことはしない。『体系論』の中でコンディヤックは、人工の機械を「自然の模倣」[22]とみなしている。どういうことか。コンディヤックによれば、宇宙自体も時計のような一つの機械である。しかしながら、宇宙を作った者（神）がどのようにそれを作ったかを知ることは人間には不可能であり、人間はただそれを模倣するしかない。すなわち、人工的機械の「最初の原因」は人間にとって理解可能である。だが、宇宙といった自然的機械は不可知である、というのも人間にとってそれはすでに作られたものであるからだ。それが「第一原理」なのである。つまり、コンディヤックの理神論的性格が上記のテクスト上の混乱として表出したのであり、山口が指摘したような概念規定上の矛盾ではない。

話が逸れたが、整理しよう。コンディヤックにおける「原理」概念とはある運動、つまりある因果関係を引き起こすところの原因である（例えば、万有引力）。この意味での「原理」は非時間的である。なぜなら、常に我々はその原理を観察することができるからである。次に、彼の「起源」概念は因果の連鎖（「複数の中間的諸原因」「原因と結果の進行」）の果てにある「最初の原因」であり、それは、「分析 analyse」[23]によって遡及的に認識可能なものである。この点を明らかにするために『類義語辞典』の中の「起源」の概念規定に戻ろう。

コンディヤックは二つの説明を「起源」に与えている。まず、起源とは「遠くにある原因」である。「原因」は、それが引き起こす直接の結果との一組（因果）としてコンディヤックによって定義されるが、「起源」はそうではない。次に、「起源と結果の間には複数の中間的諸原因が存在する」という説明に目を向けよう。コンディヤックの「原理」の最初の定義である原因と結果は二つで一組であるという定義（「原因とは、生み出された一つの結果、あるいはその契機であるものだけを指し示す」）を思い起こせば、起源と結果は、中間的諸原因の連続によって一直線に結ばれると考えることができる。では、『類義語辞典』の「原理」項目における「起源」の記述から、コンディヤックが参照せよと指示するもう一つの項目「始まり」を見てみよう。

> 始まり［commencement］とは、ある事柄の最初の部分、あるいはある事柄が存在する最初の瞬間である。誕生［naissance］とは現れる瞬間である。起源とは誕生が負っているところの原理である。ある家の創始者はその起源である。一人の子供は母の胎内の中にその始まりを持っており、彼の誕生とは彼が世界に現れた時である。[24]

まず、コンディヤックにとって「起源」とは「原理」や「始まり」との類義語である。項目「原

理」で説明された起源とは、ある結果にたいする直接的な原因ではない（「起源とは、遠くにある原因である」）。ある結果から因果関係の連続性を遡っていくことによって発見される「最初の原因」こそが、「起源」の意味内容であった。

このことを説明するために、項目「始まり」の中で、コンディヤックは家族の比喩を用いている。彼は一人の子供をひとつのある結果として考える場合、家の創始者を「起源」として、母の胎内を「始まり」の場として、出産を誕生として喩えている。子供が誕生するためには、その家系の存在が必要条件であり、つまり、家の創始者が「誕生が負っているところの原理」である。なぜなら、家の存在という原因によって、母の胎内のなかで子供は「始まり」を持つのだが、子供がその胎内の中で成長するためには多様な原因が存在する（例えば、細胞分裂やへその緒からの栄養）。そして、最後に出産されることによって子供は誕生する。起源としての家の創始者から結果としての子供の間には、コンディヤックがいうように「複数の中間的諸原因」が存在する。

「原理」、「始まり」の二項目における「起源」概念を検討した結果、コンディヤックは「起源」をある結果の間接的、かつその結果と「複数の中間的諸原因」によって直線的に結ばれた所にある「最初の原因」と考えていたということがわかる。『人間認識起源論』（1746）においても、「起源」を「最初の原因」としてコンディヤックは考えており、序文にてコンディヤックは先人たちの哲学を批判するのだが、「哲学者たち」が哲学的に誤っていることだけを指摘するだけでコンディヤックは満足しない。彼らが誤りに陥った「最初の原因」にさかのぼる必要をコンディヤックは説く。

> しかしこうした哲学者たちのあれこれの誤りを発見できたとしても、その原因が見抜けなければ十分ではなかろう。つまり誤りの一つの原因からそのまた原因へと遡り、最初の原因［une première cause］にまで到達せねばなるまい。(25)

ここからわかるように、コンディヤックにおける「起源」概念の意味内容は、ある事象における「最初の原因」であるといえる。

では、ルソーの場合はどうであろうか。上述したように、『不平等論』のなかでルソーは様々な事象の最初の原因について直接述べることを避けている。「人は身振りの代わりに声を分節化することを思いついた［s'aviser de］」［DOI:148］(26)、また「土地を囲い込み、『これは私のものだ』ということを思いついた［s'aviser de］最初の者が［……］」［DOI:164］というようになぜ思いついたのかは説明せず、「起源」を曖昧にしている。すなわち、『不平等論』で描かれる自然状態から社会状態へいたる人類史は、一見したところ連続性をもっているように見えるが、言語や所有の誕生のところで常にルソーは「断絶」を挿入している。

この断絶はルソー哲学の中心にも潜んでいる。ルソーが規定する人間の魂に最初から書き込まれている「自己完成能力 perfectibilité」にも断絶は存在する。人間の進歩（あるいは堕落）を引き起こす自己完成能力は、確かに人間を不平等にする「あらゆる不幸の源泉［la source de tous les malheurs］」［DOI:142］ではある。それゆえ自己完成能力は自然状態を社会状態に移行させる原因ではあるが、それ自体では潜在的 en puissance であり、顕在化するためには「外的原因の偶然の協力」を必要とする。

自己完成能力や社会的徳、そしてその他の自然の人間が潜在的に授かった諸能力はそれら自身では決して発達することができなかったということ、それらの諸能力を発達させるためには、複数の外的原因の偶然の協力が必要であったこと、その外的原因は決して生じないこともありえたこと、そしてそれらの原因がなかったなら自然の人間は永遠に原初的体制のままであっただろうということを私は示した後に、私の残されている課題は以下のことである。すなわち、人間という種を堕落させながら同時にその理性を完成させることを可能にし、ある存在を社会的なものにしながら同時に邪悪にもした様々な偶然を、そして人間と世界とを遠くの地点から我々が見ている地点にまで連れてくることを可能にした偶然を考察し、関連づけねばならない。［DOI:162］

上記の引用を見ると、ルソーは言語、所有、自己完成の顕在化の原因を偶然だと主張し、コンディヤックの考える「最初の原因」としての「起源」を知ることをルソーは欲していない。すなわち、「最初の原因」を確定し、そこから因果関係の連鎖を論理的に追って説明するというコンディヤック的起源論を、ルソーは『不平等論』でおこなったのではない。そして、神という「超越的な第三者」(27)を自身の論理の内に挿入することもルソーは許さない。ではいったい、どのような方法によって「起源論」を描こうとしたのであろうか。

３．『人間不平等起源論』における五つの命題とビュフォン地質学

『不平等論』第一部末にて、ルソーは不平等の起源を「外的原因の偶然の協力」と断定し特定不可能だとした上で、自らの使命を不平等の「起源と進展とを、人間精神の相継ぐ発達［les développemens successifs de l'Esprit humain］のなかに示すこと」［DOI:162］だと宣言する。そして、その作業は『不平等論』第二部で実行される。

しかしながら、その前にルソーはある告白をする。すなわち、「相継ぐ発達」を描くことは真の事実ではなく、「推測 conjecture」に過ぎないとルソーは言う。「私が記述しなければならない出来事はいろいろな起こり方があり得たので、それのどれを選択するかは推論［conjecture］によってしか決定できない」［DOI:162］。だが、ルソーにとって「推測」という方法は「真実を発見するために我々が持ち得る唯一の方法」［DOI:162］であり、この方法によってしか人間は「相継ぐ発達」を描くことができない。

その推測方法を確認することが本稿における目的なのであるが、ルソーはその推測方法を単純な五つの命題の形で述べるに留り、その意味内容については説明していない。まず、その各命題を引用しよう。

命題１：時の経過が出来事におけるわずかな真実らしさの埋め合わせをする。
命題２：非常に軽微な原因でも、絶えず作用するときには驚くべき力を発揮する。
命題３：ある種の仮定は、一方において破壊することのできないものであるが、他方において、事実としての確実性を与えることもまたできないものである。
命題４：二つの事実が所与のものとして与えられ、それを未知のあるいは未知と見なされている一連の中間的諸事実によってつなげなければならないとき、歴史が明らかであればそれらの事実

を与えるのは歴史であるが、そうでない場合は、それらをつなげることのできる似たような事実を確定するのは哲学である。
命題５：実際に起きた事柄に関して言うならば、事実というものは、それらの類似性によって我々が想像するよりもはるかに少数のいくつかの種類に還元される。

以上の五つの命題［DOI:162-3］こそが、ルソーの歴史哲学の核心であり、『不平等論』第二部で展開される「推論」の方法論である。この命題について唯一ゴールドシュミッドだけがビュフォンの影響だと指摘している(28)。我々はビュフォンを直接読みつつ、ルソーとの内的連関についてより詳細に記述せねばならない。そこでまず、ビュフォンの方法論について確認しよう。

ビュフォンは『地球の理論と歴史 *Histoire et théorie de la Terre*』(29)（1749）という論考を、『自然の歴史 *Histoire naturelle*』(30)第一巻の第二論文として掲載している。ここでは動物や人間についての考察ではなく、地質学すなわち「地球の歴史」が叙述される。まず、『地球の理論』冒頭にてビュフォンは先人たちの「地球の理論」を批判する(31)。ビュフォンによれば、彼らは様々な事実を混同し「自然学に寓話を加えた」［HTT:231］に過ぎず、彼らの説は学問 science として成り立っていない。ビュフォンの目的は、彼らのうち建てた寓話のような「大規模な体系 grands systèmes」を作り上げることではなく、むしろ「平凡なもの commun」を作り上げることである。

そのためにビュフォンは三つ規則を挙げる。まず、歴史家 Historien は作り出す者ではなく、叙述する者である。次に、歴史家はいかなる「推定 supposition」もしてはならない。最後に、「観察を組み合わせ、諸事実を一般化し、明晰な観念や一貫性を有しかつ真実らしい［vrai-semblables］諸関係の体系的秩序［un ordre méthodique］を精神に示すようなある一つの全体を諸事実から構成するためにしか歴史家は自らの想像力を使用してはならない」［HTT:232］。

以上がビュフォンの方法論の基礎である。ここで重要なのが「真実らしさ vraisemblable」である。方法論を概述した後に、ビュフォンは自らの理論を数学的真理とは違い、真実らしいものでしかないと述べる。なぜなら、理論は観察された諸事実から帰納的に構成されたものに過ぎないからである。ビュフォンが『地球の理論』で批判する先人たちは観察するより前に理論を構成してしまった。ここがビュフォンの批判の要点である。では、以上を踏まえた上でルソーの五つの方法論を検討しよう。

命題１に対応する記述は『不平等論』第二部でも見ることができる。「私は矢のように無数の世紀を駆け抜ける。流れゆく時と私が言わねばならぬ多くのこととほとんど感じられない初期の進歩がそうさせるのである。出来事が起きるのが遅ければ遅いほど、出来事が描写されるのは早いのである」［DOI:167］。ここで問題となっているものは時間である。

ルソーは分節言語の誕生を「諸言語の制定のためにはすでに人々が結びつけられた社会が必要だったのか、あるいは社会の設立のためにはすでに発明された言語が必要だったのか」［DOI:151］というようにアポリアとして定式化し、この問いを後世に委ねた。だが、ここでルソーは言語の誕生について思考することを断念したわけではない。ルソーはここで、「時間」の概念を導入したのである。「私は審査員に［……］あらゆる言説の論理を作り上げるためにはどれほどの時間と知識が必要であったのかについて考えてくれるようお願いする」［DOI:151］。すなわち、莫大な時間を導入することによって、人間の思考ではアポリアに陥ってしまうような難問を解決することができるのである。しかしながら、なぜ時間が解決できるのか。それは次の命題が答えてく

れる。

命題２についても命題１と同様に対応する記述が『不平等論』で登場する。『不平等論』原注Ｘでは以下のように書かれている。「気候や空気や食べ物や生活様式や一般に習慣というものが、如何に大きな影響を及ぼすか、そして特に、同じ原因が何世代にもわたって持続的に作用するとき、それらが如何に驚くべき効力を発揮することになるか、知らないのである」［DOI:208］。この考えは、ビュフォンの地質学からのものである。ビュフォンが山や河口の形成について論じる際、今までそれを作ってきた原因だと考えられてきた「激しい変化 révolution」、すなわち天地創造やノアの大洪水という出来事は彼の関心外であった。その部分を引用しよう。

> 二千年、また三千年以来地上に起こった諸変化は、天地創造のあとの最初の時代に起こったはずの激しい変化［révolution］とはまったく比較にならない。というのも、如何にして重力及び物質の粒子を近づけ集合させる他の力の連続的な作用［action continuée］によってしか地上の全ての物質がその安定性を獲得しなかったのか、そして地表はその始め、後に地表がそうなったようには固くはなかったに違いないということは容易に証明できる。また、何世紀もの隔たりの中で今日ほとんど感じられない諸変化［changements presqu' insensibles］しかもたらさない同一の諸原因がたったの数年で甚大な激しい変化を引き起こすに違いない、ということも容易に証明できる。［HTT:252-3］

地理上の変化について説明するために、ビュフォンは激しい変化ではなく緩慢かつ持続的に働く「ほとんど感じられない」原因に訴える。そのような原因をビュフォンは重力と潮の満ち引き運動だと主張し、重力と潮の満ち引きによって土が少しずつ移動を繰り返し山や河口を形成していく姿を『地球の理論』の中で叙述した。すなわち、『地球の理論』においてビュフォンは水成論者 neptunisme であった(32)。

そして、重力と潮の満ち引き運動による地形の変化は、我々の目には見えない微細な変化であると同時に現在も働いている。このような現在において作用している原因を地質学では「現在原因 cause actuelle」と呼ぶ。ビュフォンが求めていたことは、現在原因を記述することであった。そして、それこそが人間にとって思考可能な地質学なのである。「常に生じる結果や絶えず次々と起こり、繰り返される運動、恒常的かつ常に反復される作用が我々にとっての原因であり論拠なのである」［HTT:274-5］。

また、この現在原因による変化は非常に緩慢なものである。それゆえ、「［海水による浸食］運動は突然に［tout à coup］生じたのではなく、推移連続的［successivement］にかつ徐々に［par degrés］生じたのであり［……］」［HTT:254］というように、ビュフォンは地形の変化を語る際つねに「少しずつ peu à peu」「徐々に par degrés」「推移連続的 succesive(33)」という莫大な時間を読者に意識させる表現を用い、地形の変化が「突然 tout à coup」起きるのではないことを『地球の理論』の各所で主張している。

上記のようなビュフォン地質学の特徴は、ルソーの『不平等論』にて色濃く反映されている。例えば、所有の観念については以下のように述べている。「所有の観念は推移連続的［successivement］にしか生まれ得ない［所有に］先立つ多くの諸観念に依拠しており、人間精神のなかに突然に［tout d'un coup］形成されるのではない」［DOI:164］。すなわち、ルソーの

命題２はビュフォン地質学の現在原因の採用を意味する。そして、命題１が示すように時間という効果によって現在原因を記述することは、人間にとって認識不可能な出来事（つまり「出来事におけるわずかな真実らしさ」）を認識可能なものに変換することができるのである。

しかしながら、この点に関して『言語起源論』(34)を読むと我々の論証にある疑問が生じるだろう。『言語起源論』における人間が分散して生きていたとされる自然状態、すなわち「永遠の春」の変化についてルソーは以下のように述べている。

> 人間が社交的であるように望んだ者が、地球の軸に触れ、その軸を宇宙の方に傾けた。このわずかな動きによって、私は地球の表面が変化し、人類の使命が決定するのを私は見た。［EOL:401］

スタロバンスキーは、ルソーが「永遠の春」の変化の原因を「地軸の動き」にしたことをビュフォンとの重要な差異だと指摘した(35)。上述したように、ビュフォンは地理形成を叙述するために、「激しい変化」を否定し、「現在原因」を記述しようとした。だが、ルソーは『言語起源論』において「地軸のズレ」という大変化によって「永遠の春」からの脱出劇を描いた。他の箇所では、人々の分散の状態からの脱出をルソーは「自然の偶発事の所業［l'ouvrage des accidens de la nature］」［EOL:402］と記している。その例として、洪水や噴火、地震、雷による火災が挙げられている。

『不平等論』では、「激しい変化」を用いず「現在原因」を用いてロングレンジの歴史を描こうとしたルソーが、反対に『言語起源論』では地軸のズレや洪水といった「激しい変化」を用いたという矛盾を我々はどのように解釈すべきなのであろうか。

この矛盾は、ルソーの教会対策と叙述の簡略化に由来すると考えることができる。「社交的であるように望んだ者」は神なのだろうか。答えは「そうとも言える」ということになるだろう。なぜなら、人間が社交的になるためには人間自身からそうなるのではなく、徹底的に外的な影響であれば良いからである。それゆえ、「社交的であるように望んだ者」は神でも洪水でもルソーにとっては「外的」であれば良いのである。

そして、「地軸のズレ」の後には、「宮殿や都市が建設されるのが見える。芸術や法律や商業が現われてくるのが見える。諸民族が形成され、広がり、消滅し、波のように相次いで起こるのが見える」［EOL:401］という文章で、「見える voir」を多用した詩的技法を用いつつルソーは社会の形成を一気に語る(36)。

つまり、人間の無 - 社交性から社交性への過程の理論的断絶にルソーは、「社交的であるように望んだ者」を配置することによって、それに「神」と「激しい変化」という二重の役割を与えたのである。そして、人間にとって「外的な」影響が社会を起動させるという物語を描いたのである。この二重の役割が、当時の哲学書に必要不可欠な教会対策と、『言語起源論』の主題に直接的に関与しない(37)『不平等論』にて展開された社会形成の議論の簡略化を同時に可能にしたのである。

話を戻そう。命題３では、命題１と２の現在原因と時間による論証は仮説にしか過ぎないが、単に恣意的なものだとして排除することもできないものであることを示している。ルソーがここで言う「仮説」とは、同時代の人類学的知見に基づいた事実観察からなっている。ここから上記

で述べたビュフォンが目指すところの「観察を組み合わせ、諸事実を一般化し、明晰な観念や一貫性を有しかつ真実らしい諸関係の体系的秩序を精神に示すようなある一つの全体」を構成しようとするルソーの意志が読み取れる。

命題４は本稿のルソー読解において非常に重要である。まず、命題が指示する「二つの事実」とは何か。一つは、『不平等論』第一部でくり返し説明される自然状態である。事実 fait と書かれているが、命題３が示すようにこの事実は現実の事実ではない。すなわち全くの虚構でも事実でもない境位の観察に基づく仮説である。もう一つは、ルソーが生きる不平等に満ちた実際の専制的支配の状態である(38)。この二つの事実をどのように繋げるのか。それは一連の中間的諸事実によってである。ルソーが中間的諸事実という言葉を用いるのを見て、我々はコンディヤックの言葉を思い出す。それは『類義語辞典』でコンディヤックが用いていた「中間的諸原因」という言葉である。コンディヤックは、「最初の原因」としての起源とある結果の間には中間的諸原因が存在すると述べたが、ルソーは中間的事実という表現を用いる。すなわち、「二つの事実」の間にルソーは因果の連続体を置くことはしない。

その理由について、ビュフォンを経由しルソーの各命題を見てきた我々には語ることが許されている。すなわち、スタロバンスキーが主張した「原因と結果の連鎖を展開する系譜的説明」をルソーは望んでいなかった。彼はビュフォン地質学が採用した現在原因によるゆるやかな説明とでも呼ぶべき方法論を取っていた。莫大な時間の流れの中に存在する現在原因、すなわちゆるやかな作用は我々人間には認識不可能である。しかしながら、そのメルクマールは認識可能である。そのメルクマールとは、所有観念、鉄と小麦、法の誕生である。このような各段階についてルソーは饒舌に語るのである。しかし、その各段階の移行については「偶然だ」といって沈黙を守る。だが、ビュフォン地質学に負っていたルソーにとってこの移行を語ることは彼の守備範囲ではないのである。それゆえ、彼は因果関係の連鎖の記述を目的としない「中間的事実」という語を使用するのである。

命題５もビュフォンの影響のもとにある。『地球の理論』の中でビュフォンは「地上の表面の無数の変動、大混乱、個別的変化、変質」を「海水の自然的運動」のような一般的原因に還元した。まさに、『不平等論』にて表明された「人間の魂の単純な作用」と考えられる「自己愛」と「憐れみの情」および「自己完成能力」こそがルソーにおける一般的原因であり、この二つの原因の運動の変奏が様々な諸事実を生起させているのである。しかし、ここにビュフォンとルソーの重大な差異が存在する。

ビュフォンは、地形の形成を潮の運動によって説明するのであるが、その原因による地形の形成は過去において確実に起こったのであろうし、将来においても起こりうると彼は考えていた。『地球の理論』の冒頭ではオウィディウスを引用し、結語でもヨーロッパの大地がいつの日か海になり、また海は大地になるという決定論的な世界の循環性を彼は主張していた。

しかし、ルソーの態度はビュフォンとは異なる。なぜなら、ルソーは彼が生きていた社会が必ずしも必然ではなく、上述したように「偶然」にすぎないと考えていたからである。すなわち、ルソーは、ヨーロッパ文明そのものを歴史上の「偶然」の産物に帰そうと考えていた。だが、我々はここにルソーの自然への賞賛、社会への憎しみだけを読み取るべきではない。このようなルソーの消極的態度は、むしろ歴史を変える可能性を人間が有してもいるという積極的な意識を読み取るべきである。なぜなら、自然状態から社会状態への移行が起きなかったかもしれず、偶然とい

う余剰が残されているならば、そこには世界を改変しようとする人間の意志[39]が歴史の中に入り込む余地が存在するからである。それゆえ、ルソーは従順なビュフォン主義者でもないのである。

４．おわりに

本稿ではまず、ルソーの「起源」概念をコンディヤックとの比較検討を通じておこなった。その結果、コンディヤックが述べる因果関係の果てにある「最初の原因」としての「起源」とは異なり、ルソーの「起源」はつねに断絶が含まれているということが明らかとなった。すなわち、コンディヤックの起源論は人間本性という「原理」としての起源から因果の連続を辿ることを目的とし、反対にルソーは論理的因果関係の連鎖によってではなく、断絶した「諸事実」を記述しようとした。

そして、そのようなルソーの起源論はビュフォンの地質学に類似した方法論を採用していた。よって、コンディヤックを頂点に据える啓蒙時代の形而上学とは別の潮流、すなわちビュフォンの自然学的系譜にルソーの歴史認識は位置していると考えられるのではないだろうか。

また、ヴァルガスの最近の研究[40]によって、「感じられない原因 causes insensibles」「少しずつ peu à peu」という現在原因を思わせる表現が様々なルソーの政治的著作のなかに頻出するということが明らかとなった。これは、上記で示してきたルソーの歴史哲学が『不平等論』限定のものではなく、彼の全哲学体系に含まれうることを示しているのではないだろうか。

本稿では、ルソーがいかにして歴史の運動を把握しようとしたのかをコンディヤック、ビュフォンを経由して明らかにしてきたのであるが、ヴァルガスの研究を踏まえた上で我々は次なる問いに進まねばならない。すなわち、ルソーはいかにして歴史を動かそうとしたのか、いかにして社会を構築すべきと考えたのか。この問いが我々の次の課題であることを確認したところで、稿を閉じる。

（１） STAROBINSKI（Jean）, 1971, “Rousseau et la recherché des origines”, *Jean-Jaques Rousseau: La transparence et l’obstacle*, TEL Gallimard, p.324.（=1974、「ルソーと起源の探究」、山路昭訳、『現代思想』、第２巻第５号、211頁）

（２） 例えば、古茂田宏、1980、「ルソーにおける『情念』概念の構造」、『倫理学年報』、第29号。中島ひかる、2006、「時間と不平等――『人間不平等起源論』におけるルソーの時間概念」、『東京医科歯科大学教養部研究紀要』、第36号。

（３） DERRIDA（Jacques）, 1967-8, “La linguistique de Rousseau”, *Revue internationale de philosophie*, N° 82, p.449.（＝2007、「ジュネーヴの言語サークル」、『哲学の余白』上、高橋允昭、藤本一勇訳、法政大学出版局、248頁）

（４） DERATHÉ（Robert）, 1948, *Le rationalisme de J. -J. Rousseau*, Presses Universitaires de France, Paris, p.30.（＝1979、『ルソーの合理主義』、田中治男訳、木鐸社、23頁）。

（５） EIGELDINGER（Marc）, 1962, *Jean-Jacques Rousseau et la réalité de l’imaginaire, Baconnière*, Neuchâtel, p.120.

（６）「或る構造から他の構造への移行――たとえば自然状態から社会状態への移行――は、いかなる構造的分析によっても説明され得ない」DERRIDA（Jacques）, 1967, *De la grammatologie*, Ed de Minuit, Paris, p.365.（＝1972、『根源の彼方に　グラマトロジーについて』、下、足立和浩訳、現代理想社、222頁）。「自然状態はそれ

自体に基づいて閉じている」GOLDSCHMIDT（Victor）, 1974, *Anthropologie et politique. Les principes du système de ROUSSEAU*, J.VRIN, Paris, p.219.

（７） BACZKO（Bronisław）, 1974, *Rousseau: solitude et communauté*, Centre de recherche historique de la Sorbonne, Paris, p.88.

（８） 古茂田宏、1980、「ルソーにおける『情念』概念の構造」、『倫理学年報』、第29号、20頁。

（９） コンディヤックの著作は、全てル・ロワ編集の『コンディヤック哲学著作集』全三巻（*Œuvres philosophiques de Condillac*, 1947（vol.I）, 1948（vol.II）, 1951（vol.III）, texte établi et présenté par Georges Le Roy, P.U.F.）から引用した。引用する際は、タイトル、巻数、頁数のみを示す。

（10） *ENCYCLOPÉDIE OU DICTIONNAIRE RAISONNÉ DES SCIENCES DES ARTS ET DES MÉTIERS*, mis en ordre & publié par M. Diderot; par M. D'Alembert, t.XI, p.648b.

（11） *Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux*, t.VI, p.397a.

（12） CONDILLAC, *Dictionnaire des Synonymes*, III, p.416b.　また、『論理学または考える技術のための初歩』（1780）の中で、コンディヤックは「原理は始まりと類義語である」と述べている。CONDILLAC, *La Logique ou les premiers développements de l'arts de penser*, II, p.403b.

（13） CONDILLAC, *Dictionnaire des Synonymes*, III, p.459a. 傍点筆者。

（14） コンディヤックによる項目「原因 cause」では以下の説明がなされる。「ある結果を生み出すもの、広義では結果の契機であるもの。『原理 principe』を参照せよ」*Ibid.*, p.112b. 項目「結果 effet」の説明は以下の通りである。「ある原因によって生み出されたすべてのもの。結果は物理的なものと精神的なものに対しても使われる」*Ibid.*, p.232b.

（15） 山口裕之、2002、『コンディヤックの思想　哲学と科学のはざまで』、勁草書房、258頁以下参照。

（16） CONDILLAC, *Traité des Systèmes*, I, p.198b.

（17） *Loc. cit.*

（18） *Ibid.*, p.200a.

（19） 本稿では、通常「力学」と訳される mecanique を「機械学」と訳した。なぜなら、「力学」では物体間の運動関係などの抽象的な物理学を想起させるからである。コンディヤックが時計の例を多く用いるように、mecanique とはむしろ歯車といった様々な部品からなるひとつの機構、構造に関する学である。それゆえ、「機械学」と訳した。

（20） *Ibid.*, pp.212b-13b.

（21） 山口裕之、前掲書、262頁。［　］内は引用者。

（22） コンディヤックは『体系論』の初版で、機械学を「人工的機械に運動の法則を適応することを学ぶための学問であり、すなわち自然の働きの模倣である」と定義しているが後に、この部分を削除した。CONDILLAC, *Traité des Systèmes*, I, p.212.

（23） 本稿では詳述できないが、この「分析」こそがコンディヤックにおける最重要概念である。そして、ルソーは『戦争状態』という断片の中でこの「分析的方法」を批判している。この点に関しては別稿に譲る。

（24） CONDILLAC, *Dictionnaire des Synonymes*, III, p.133a.

（25） CONDILLAC, *Essai sur l'origine des connoisssances humaines*, I, p.4a.（＝1994、『人間認識起源論』上、古茂田宏訳、岩波文庫、17頁）

（26） 以下『不平等論』を DOI と略し、その頁数をあげる。"Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les homes", *Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau*, tome III, Bibliothèque de la Pléiade,

Gallimard, Paris.

(27)　川合清隆、2002、『ルソーの啓蒙哲学　自然・社会・神』、名古屋大学出版会、138頁。

(28)　GOLDSCHMIDT（Victor）, op. cit., p.388.

(29)　以下『地球の理論』と略記。引用にはステファン・シュミット監修によるビュフォン全集を用いた。Georges-Louis Leclerc de Buffon, «Histoire et théorie de la Terre», *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roy*, Œuvres complètes, tome I, texte établi, introduit et annoté par Stéphane Schmitt avec la collaboration de Cédric Crémière, Honoré Champion Éditeur, 2007.『地球の理論』を引用する際はHTTと略記し、頁数をあげる。

(30)　本稿では、定訳の『博物誌』ではなく『自然の歴史』と訳す。というのも、「誌」という言葉は共時的なものの集積のみを想起させるからである。本稿で見ていくように、ビュフォンは通時的な自然の歴史の変化を捉えようとしていた。この点を鑑み、「歴史」という言葉を採用する。

(31)　批判されるのはウィリアム・ウィストン（1667-1752）、トマス・バーネット（1635-1715）、ジョン・ウッドワード（1665-1728）である。

(32)　しかしながら、ビュフォンは後の『自然の諸時期』（1778）では火成論者に転向した。火成論者ビュフォンに関してはゴオーの研究が詳しい。GOHAU（Gabriel）, 1987, *Histoire de la Géologie*, Édition La Découverte.（＝1997、『地質学の歴史』、菅谷暁訳、みすず書房）

(33)　この訳語は戸部松実に倣った。戸部松実訳、『不平等論　その起源と根拠』、国書刊行会、2001。

(34)　本稿では、『不平等論』と『言語起源論』の成立年代に関する論争に介入するつもりはない。というのも、本稿の力点は、ルソーの「起源」概念、「起源論」という形式の解明に置かれているからである。以下、『言語起源論』をEOLと略し、その頁数を挙げる。"Essai sur l'origine des langues", *Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau*, tome V, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris.

(35)　STAROBINSKI（Jean）, 1990, « L'inclinaison de l'axe du globe », dans J-J.ROUSSEAU, Essai sur l'origine des langues, Gallimard, "Folio", p.168.

(36)　*Ibid.*, p.166.

(37)　ルソーは、社会が存在したとしても音声言語の必要性は説明できないと主張している。cf, EOL, p.378.

(38)　「[二つの] 与えられた事実とは、自然状態とその当時の専制的支配の状態である。ルソーが『社会契約論』の第一部において、自分はそれらをしらない、と言ったときに言及しているものは、この中間項的な諸事実であって、自然状態の諸特質についてではないのである。」STRAUSS（Leo）, 1953, *Natural Right and History*, The University of Chicago Press, p.267.（＝1988、『自然権と歴史』、塚崎智・石崎嘉彦訳、昭和堂、389-90頁）

(39)　ルソーの意志論、及びデカルト的二元論について本稿では詳述できないが、以下の文献が詳しい。川合清隆、前掲書、第八章。

(40)　VARGAS（Yves）, 2008, «A propos des <causes insensibles> politique et philosophie dans *Les letters écrites de la montagne*», *Annales de la société Jean-Jacques Rosseau*, t. XLVIII.

［学外研究者による査読を含む審査を経て、2010年３月19日掲載決定］

（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）